

い」としたが、隠密に研究は続けられたが、空襲の激化で中止となった。

第二次大戦後、アメリカ軍はドイツと日本の核開発状況を調べたが、核開発にはほど遠い段階であり、核の脅威は全くなかった結論付けた。

この課題の解答は

第二次大戦中という社会的背景があり、戦争に勝つためという大義名分で悪魔の兵器「原子爆弾」開発が最初でした。

このようにしてアメリカが独占的に開発した原子爆弾でしたから、アメリカが世界を支配できる位の軍事力を持ったわけですが、マンハッタン計画にはソ連側スパイが入り込んでいたり、科学者が買収されていたり、原子爆弾開発の秘密は鉄のカ - テンの中に持ち込まれ、核実験が世界中で行われ、放射能を撒き散らす愚行が行われてきたのです。

かつて海軍力が強国の証であったように、より性能の良い原・水爆を多数持つことが強国のステータスとばかり実験を繰り返され、アメリカ 1122 回、ソ連 715 回（西側の観測）その他の国を含めた世界の核実験回数は 3000 回を超える。

このため半減期の長いヨウ素 131 は福島第一原発の放射した量の約 5000 倍、セシウム 137 が約 100 倍を放出した。

これらの実験は、自国では実験できないので、南太平洋の島々や、アフリカ、オ - ストラリアの砂漠等で行われた例が多い、しかし過疎とはいえ原住民が生活していたのだから何らかの被害を及ぼしている、が、実験国は無視して強行した。

マ - シャル群島では、島を追われ別の島に強制移住されたり、放射能の被害もでている。我国でもマグロ延縄漁船「第五福竜丸」が被曝した。

この猛烈な核開発競争は、第二次世界大戦が終わり、やっと世界に平和が訪れたと思いきや、同盟国であった米ソが対立、世界は二極に分解、冷戦状態に陥り、より多くの権力を握るには、かつては砲艦外交の脅しあいであったが、時代は核兵器保有の脅し合いに替わり、いかに性能の良い核兵器を持つかに鎬を削った。

従って開発するより他国の進んで技術を盗んだ方がてっとり早い方法だとばかり、猛烈なスパイ合戦、ここにまた悲劇がおきた。

原爆開発の総責任者であったロバ - ト・オッペンハイム - 博士は、その後の核実験に反対を表明したため、全ての公式な役職から追放され、晩年はインド哲学に救いを求めた。

ユダヤ系市民であったロ - ゼンバ - グ夫妻は、ソ連のスパイとして逮捕され、裁判の結果死刑判決、電気椅子に送られた。

そのほか、赤狩りのマッカシィ - 旋風が吹き荒れ、多数の犠牲者で暗いアメリカとなってしまった。

そして現在、平和利用として原子力発電が推奨され、原料が安価、二酸化炭素を全く排出しない夢の原子力と喧伝されてきたのが、ここにきて大きく躓き、蒸気機関、内燃機関、原子力と続いてきたエネルギー - 革命は人類に豊かな生活をもたらしてきたとされるが、本当に豊かな生活だったのか、豊かさとは何だったのか、豊かさと恐怖が同居する二面性をどう解決するのか、今後の生活はどうあるべきなのか。これに替わるエネルギー - をどう求めるべきなのか、課題は多い。